



夜という時空間及び祝祭という非日常の混淆性 : 神戸大学厳夜祭を例に

田村, 豪

(Citation)

海港都市研究, 14:3-28

(Issue Date)

2019-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011265>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011265>



夜という時空間及び祝祭という非日常の混淆性

——神戸大学厳夜祭を例に——

田村 豪

(TAMURA, Tsuyoshi)

I. 祭礼研究の課題

祭礼、祝祭といった現象はこれまで社会学、人類学、民俗学のなかで広くそして多数論じられてきたところである。だが芦田がいうような祭りの困難さ、すなわち「日常性という大海のなかの孤島のような現代の祭りは、日常的な活動・価値・規範・利害などによって包囲され、監視され、規制され続ける」（芦田 2001 : 32）ことによる祭りの難しさは近年ますます増しているように感じられる。2018 年だけでも夏には徳島の阿波踊りの実施に関して大々的にニュースに取り上げられ、秋には渋谷でのハロウィンの騒動がニュースになった。世の中としても祭りないし祭りのなものへの関心は依然高いといえるだろう。

では祭りとは何か。芦田は祭りを以下のように定義する。

「聖なるもの」を求心的シンボルにして（聖中心性）、日常生活とは異なる規則に従い（非日常性）、厳粛—厳格（儀礼性）と熱狂—放埒（祝祭性）のなかで、人びとが一時には対抗しつつ—一体化し（共同性）、定期的に繰り返す（周期性）、制度的集合行動（催事性）。(ibid : 29)

このような祭りに対してこれまで多種多様な研究の蓄積がある。谷部は日本において祭礼研究を切り開いた人物として中村孚美と米山俊直を挙げ、両者の研究がその後の祝祭研究の発展につながっていったと評価しつつも、「2 人の研究は、祭礼を詳細に記述することに重点がおかれていたように思われる」（谷部 2011 : 64）とし、中野も民俗学の立場から、従来の祭礼研究の多くが社会的要因からの分析しかなされておらず、これを重要な分析視角であるとしながらも、社会的要因からの分析のみでは、祭礼のなかで見える人々の「感情や不合理性、その場を形成するもろもろの要素、要素の重なりあいのなかで醸成される

場所性など」は捨象されてしまうとする（中野 2005）。ということは、谷部の指摘する、ほかの現象ではなく祭礼を扱い分析したからこそ見えるものや、中野のいう祭礼の現場における人々の様相やその構成要素、場所性といったものを考察しなければならない。

本稿では、以上のことを踏まえて、ここでは祭りという現象とそれが生じる夜という時空間を検討することを目的とし、特に祭りが行われる場所と夜という時空間に注目する¹。その際の事例としては夜に開催されていた神戸大学厳夜祭という学園祭を扱う。もちろん人類学や民俗学が扱ってきた儀礼や祭礼と大学の学園祭という対象は大きく異なる。先の芦田の祭りの定義に照らしてみても、大学祭には、明確な「聖中心性」や「儀礼性」は見られない。しかし大学成員が一堂に会し、日常的には開催されない模擬店などが出店されることを考えれば、非日常性があるといえるし、ライブコンサートが行われるなどすれば熱狂も生じるために祝祭性もあるといえる。そして一年あたりの開催の回数が決まっていることや大学の行事のなかに組み込まれ、そのために学内の多くの人が関わるとすれば、周期性も催事性も見えて取れるだろう。つまり大学祭は、上記の祭りの要素を完全に備えた十全な「祭り」とはもちろん言えない。というのは大学祭には、神輿や社といった何らかの求心的シンボルがあるわけではないし厳格な儀式があるともいえないからだ。それでも、その他の要素を含んでいるという点で、大学「祭」を名乗るには十分に祭りであるといえよう。そのため人類学や民俗学で扱われてきた祭りに関するでの先行研究を参照することはある程度の妥当性をもつと考えられる。

まず厳夜祭や六甲祭の概要と厳夜祭の歴史を紹介し、その後夜についての先行研究を人類学や民俗学の知見からまとめる。そしてインタビュー調査の結果を分析し、夜という時空間と祭りがいかに関連しているのかを明らかにしたい。

¹ そのためここでは夜という時空間とその場にいる個人個人との関係を中心的に論じることはしない。

なお本稿での調査方法は厳夜祭関係者へのインタビュー調査である。調査は2017年9月4日から2017年11月7日までの期間、計12人に各1時間から2時間の半構造化インタビュー調査を行った。インタビュー対象者の情報は表1の通りである。

表1 インタビュー対象者

	性別	年齢	入学年度	学部	関与していた時期	関与方法	所属サークル・部活など
A	女性	27	2008	発達科学部	2010-2011	2010ステージ企画出演、2011模擬店出店	美術部凌美会
B	女性	27	2009	発達科学部	2009-2014	2011委員長、2010-2014実行委員	軽音楽部II部
C	男性	26	2009	経営学部	2011-2012	模擬店出店	木の家、ESS、バトミントンサークル
D	男性	27	2009	国際文化学部	2010-2014	2011-2014実行委員、2011年模擬店担当	美術部凌美会
E	男性	27	2011	法学部	2011-2014	2011実行委員、2012委員長	学生震災救援隊
F	男性	25	2011	農学部	2011-2014	模擬店出店	木の家
G	男性	25	2011	工学部	2012-2014	2012-2014実行委員	学生震災救援隊
H	男性	25	2011	文学部	2011-2014	模擬店出店	木の家
I	男性	25	2012	国際文化学部	2012-2014	2012-2014実行委員、2013委員長	サッカーサークル
J	男性	24	2012	発達科学部	2012-2013	2012、2013暗黒闘技場司会	放送委員会
K	男性	23	2013	経営学部	2013-2014	2013-2014実行委員、2014委員長	学生震災救援隊
L	女性	23	2013	経済学部	2013-2014	2013-2014実行委員	灘チャレンジ実行委員会

II. 神戸大学厳夜祭の概要

2.1 厳夜祭と六甲祭の概要

厳夜祭とは、1973年に始まり、2014年で41回を数える、神戸大学では最も歴史のある祭りだった。基本的に11月の中旬から下旬の土曜日に、夕方から翌朝までの夜通しで、現在の神戸大学国際人間科学部キャンパスにおいて開催されていた。使用される場所は現在のB、C、M、N、D棟までである(図1)。2013年までは飲酒が可能だったため、夜通しお酒を飲める学園祭として知られていた。教室では、2006年から2014年まででは平均16.5店舗の模擬店が営

業され多くの模擬店が各団体にオリジナルのメニューを提供したり、小さな音楽ライブを開催し(図2²、図3)、比較的大きな教室では実行委員企画としてゲーム大会などが開かれていた。またB棟の大教室前には特設のステージが設けられ、地下アイドルや学内の軽音



図1 2014年厳夜祭パンフレット

² ここでは、写真の明晰さを重視するために写真の明るさや濃淡を調整している。他の写真も同様。

部のライブが開催されたり、ビンゴ大会が行われていた（図4）。

また運営は徹夜祭実行委員が行い、組織は委員長、副委員長をはじめ、模擬店担当、ステージ担当、実行委員企画担当、警備担当などといった部署があった。組織は六甲祭実行委員に比べ比較的少人数で、六甲祭実行委員の人数が2018年の春の段階で100人³に対し



図2 模擬店におけるステージの様子



図3 バーカウンター



図4 2014年のビンゴ大会

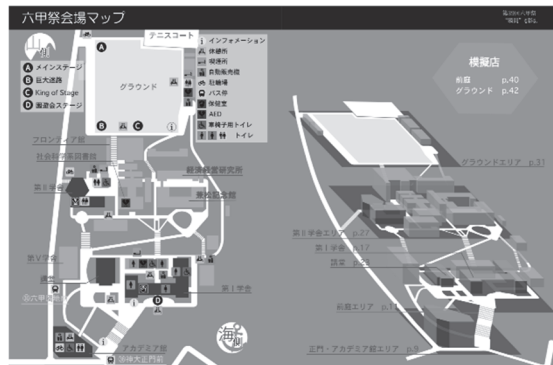


図5 2018年六甲祭のパンフレット

て、2006年から2014年までのパンフレットに掲載された実行委員の名前の数から考えると、平均13.7人である。

本文中で言及される六甲祭を若干説明すると、六甲祭は1980年に始まり、神戸大学において毎年11月に六甲台第一キャンパスで開催されている学園祭である。神戸大学のなかでは最も大規模で六甲祭実行委員会のホームページによれば毎年約4万人の人が来場して

³ 神戸大学の学内情報サイト Weebie 参照（最終閲覧日 2018 年 12 月 18 日 <http://weebie1212.com/dantai/content.php?id=229>）。

いるという⁴。多くの部活、サークルをはじめ多数の学生団体が参加している。六甲祭は六甲台第一キャンパスの第一学舎からグラウンドまでを使用し開催されている（図5）。2017年に筆者が六甲祭実行委員の当日スタッフとして参加した際に、数人の当時1回生の六甲祭実行委員に話を聞いたところ、「高校の文化祭より規模が大きい」、「（大学で）真面目なことしかかった」、「準備しんどいけど当日は楽しい」などと述べており、当時3回生の副委員長は当日のシフトでは、本部に付きっきりで「（祭りの全体の様子は）あんまり見られない」とのことであった。また小さい子供を連れた家族や小学生のグループといった日常的に大学には関わらない人を多く見かけた。実行委員企画のゲームの難易度も子供向けに調整されており、ある実行委員によれば、説明文にふりがなをふるといふ工夫はしているとのことであった。

インタビュー調査のなかで、2012年、13年とゲーム大会の司会をしていたJさんは六甲祭と厳夜祭の関係を「六甲祭夜の部みたいな感じがする」と述べており、六甲祭には前夜祭も後夜祭もないから来場者としては一連の祭りのように思われていたという⁵。ただAさんが「厳夜祭と六甲祭の共通点を見つける方が難しい」という語りに代表されるように六甲祭と厳夜祭は全く違った祭りとして認識されていた。

2.2 厳夜祭の歴史

次に厳夜祭の歴史を概観する。厳夜祭の明確な始まりは確定できない⁶が、発見できた資料から1974年に合同祭、つまりその名の通り神戸大学大第Ⅱ課程、神戸大学生協、農学部などとの合同の学園祭が開催されたことがわかる。この時代の合同祭は、学生運動の盛んな時代の後でもあり、企画も政治に関することが多かった。1978年の第5回から厳夜祭として独立した。1980年に現存する六甲祭の開始を契機に、厳夜祭はⅡ課程生の存在意義の表明として開催されるようになる。80年代には主に教養部Ⅱ課程自治会が政治運動に関する企画を主催しており、政治色が強かったが、1990年の教養部Ⅱ課程自治会の休止によっ

⁴ 六甲祭実行委員会公式ホームページより（最終閲覧日2018年12月18日 <http://home.kobe-u.com/rokkosai/about.html>）

⁵ 厳夜祭のパンフレットから六甲祭と厳夜祭が同日開催になったのは1984年が最初だったと推測できる。

⁶ 1976年の合同祭のパンフレット及び2007年の神戸大学新聞によると、1971年にはⅡ課程祭が開催されている。ここでは、当時の資料が入手できなかったため明言はできないが、厳夜祭のルーツは1971年まで遡ることも可能である。また「厳夜祭」という名前の由来の一つの可能性として、1972年に三里塚で行われたロックコンサート「幻野祭」がある。当時の厳夜祭企画の中での三里塚闘争への関与を考慮すると妥当な名前だと考えられる。

てその色は次第に薄れた。その後教養部改組の影響を受け、開催の危機を言われながらも、大学の垣根を越えた夜間主生同士のネットワークの結成や地域に開かれた祭りへの志向によって継続してきた。しかし2003年の法学部夜間部の募集停止をはじめとして2007年に最後の夜間主コースであった経済学部夜間主コースの募集が終了した。2014年秋には最後の夜間主生が卒業し、2014年の厳夜祭が国際文化学部キャンパスで開催される最後のものとなった。

Ⅲ. 先行研究—祭りと夜

ここで考察のきっかけを与えてくれるのは、柳田の祭りと祭礼の区別である。すなわち柳田は日本の祭りの重要な変わり目として、「見物と称する群の発生、すなわち祭の参加者のなかに信仰を共にせざる人々、いわばただ審美的の立場から、この行事を観望する者の現れたことであろう」（柳田 1969 : 41-2）とし、これを祭りのなかの一つの特殊事例として「祭礼」とした。そして日本の古い祭りは夕刻から始まり、翌日の朝終わるものであったとし、「この一夜が我々の祭の大切な部分」で、夜間に屋内において奉仕することが祭りの行事の中心だった。「少なくとも祭礼は昼間のもの、『祭』はもと夜を主とするものであった」（ibid : 46-7）。ということは夜に行われる「祭」は「祭礼」と異なり、共同体の非成員から「見られないこと」が重視されることになる。彼が「祭」は本来夜に行われるものだという議論をしているにも関わらず、「夜」という時間帯とその暗さと祭りとの関係を論じた先行研究は見当たらない。

しかし山口が指摘するように、暗闇は排除されているわけではない。すなわち私たちは文化と自然を区別し、後者を周縁部へと押しやるが、あらゆる文化は「文化構造のあらゆる片隅に、人がこうした暗闇と遭遇することができる仕掛けを秘め匿している」（山口 2000 : 1）し、米山も祇園祭や天神祭の研究を通して、明言はしていないが、祭りは夜開催されるものとしている（米山 1986）。以上のことから夜という契機が祭りに対して大きな影響を与えているとみなすことは妥当なことだと考えられる。

ただし山口の指摘する夜は昼に明確に対置されるものとも言い切れない。山口は世界中の神話における昼と夜の対立によって生じるメタファーを整理しながら、「夜は、昼の絶対的対立者ではなく、その彼方にある空無と昼の仲介者的相貌を帯びている」（同上 : 21）として夜と昼を明確な二項対立として考えておらず、夜の曖昧さを重視する。このような考え方は柳田の夕刻に対する考え方にも共通している。すなわち柳田は化け物が出る時間帯

は真夜中ではないとする。つまり真夜中では人々は寝静まり。化け物を化け物として恐ろしがる人がいないため、多くの化け物は宵や暁といった薄暗い時分に現われるという。そしてこのような夕刻を古くは「オホマガドキだのガマガドキだのと名づけて、悪い刻限と認めていた」とし黄昏を次のように説明する。

古い日本語で黄昏をカハタレといい、もしくはタソガレドキと言っていたのは、ともに「彼は誰」「誰ぞ彼」の固定した形であって、それもただ単なる言葉の面白味以上に、もとは化け物に対する警戒の意を含んでいたように思う。(柳田 1999 : 259)

では神話や民俗誌が提示する曖昧な夜や危険な夕刻は単に神話や民俗誌の世界にとどまるものなのだろうか。現代社会に目を向けてみれば、そのようなことはないのではないだろうか。夜でも街灯が灯り、完全な闇を感じることはないし、それゆえに「100 万ドルの夜景」が人々を楽しませている。24 時間営業の店舗があり歓楽街は夜賑わう。昼と夜の曖昧さという点において、現代社会において山口や柳田が示すような夜や夕刻は、むしろそのリアリティを顕わにしている、つまり現代社会の現象を考察するにあたって参照すべき概念となるともいえるのではないだろうか。

以下の事例分析では、以上のような昼と鋭く対立しない夜という時空間を「混淆的夜」としてこの混淆的夜と祭りがいかなる関係にあるのかをインタビュー対象者の語りから考察していく。

IV. 夜という時空間と大学という場所性

この章ではまずインタビューで語られた夜による「時間感覚の固定感」から考察し、非日常がいかにして可能になるのか、そしてこの非日常を支えるものは何かについて検討する。

4.1 夜と時間感覚の固定から生じる非日常

まず 2012 年に実行委員長をしていた E さんの話を参考にして夜という時間帯の固定性を考察する。E さんは厳夜祭が夜開催されていたことについて、「厳夜は夜来たらずっと夜みたいな。夜が明けるまでいなければ。人間的にはあの時間帯はあんまり時間が気にならん」として「時間の固定感」があったと述べている。ここでは、夜の時間帯において時間の感覚が変化していることがうかがえる。E さんは昼には「日常的なせわしなさ」を感

じており、そこからの断絶が厳夜祭にはあったとしている。その断絶は「時間の固定感」として表現されている。そしてこの固定感は、昼間なら時間の経過によって変化する明るさが変化していないように感じられるために生じている。この固定感は夜に特有のものと考えてよいだろう。昼間であれば、どの時間帯でも太陽が動いているように感じられ、常に明るさは変化し続ける。一方、夜の時間帯は始まりと終わりを除けば常に暗い。夜間という時間帯はその場の状況、環境であり、個人が作用を与えられるものでもない。このような点から考えても夜の時間はその場にいる人々にとって変わらない固定されたものになる。この夜は先ほど柳田や山口を参照した際にみた曖昧な夜ではなく、昼と鋭く対立する夜、客観的時間としての夜だといえるだろう。

日常の時間の固定が生じると E さんが「日常的なせわしなさ」からの断絶を感じたように、時間帯が非日常へと変化すると同時に日常の制度や規則が相対化されることになる。夜になることでそれまで日常的にあったものが対象化され、時間が停止するのと同様に日常の規則が停止するのである。では実際にこれらの停止は何をもたらしたのだろうか。インタビューから見られたのは「非日常」という表現であり、「非日常」は大きく二つの方向性に分かれるものだった。一方は爆発的なエネルギーの放射であり、他方、粛々とした祭りの享受である。まず 2010 年入学で 2011 年の厳夜祭で模擬店担当として厳夜祭に関わり始めた D さんは厳夜祭を、「夜だし、お酒飲んでるし、狭いし、その広さもあるだろうし。変な恰好した人いっぱいいるし。祝祭的な、ハロウィンみたいな感じ」とし、祭りには「飛び越える感覚」があったという。厳夜祭の開催日には、制度に「帰れ」と宣告されるわけではなく、「爆発的な」体力の消耗によって自分から「帰りたい」となるのだという。そしてこの「祝祭的」なものは D さんの語る「くだらなさ」や「笑い」に関わっているといえよう。すなわち、インタビューのなかで出てきた「マッスルカーニバル」や「牛乳一気飲み」といったものは、家で、一人でするものでもない。観客がそこにいて成り立つものである。そして「あの感じの笑いをやる場面ってあんまりないじゃん。学校内ですら。馬鹿なことできる」と言っていることから、これらのことは普段はできないことであるとわかる。それを許し楽しむ雰囲気をも D さんは厳夜祭に見出していた。それは模擬店における「暴力的で猥雑なもの」としても語られる。厳夜祭ではそのような猥雑さを含んだものが自明に許され存在していた。D さんは厳夜祭において「大学をジャックしている感じ」が生じていると語り、大学という一般的には「真面目な」場所が「くだらない」、「猥雑な」場所に反転し、その場所を一時的に学生のものであり、それまで自分たちのものではなかったものを自分たちのものとしている。

ではもう一方の粛々と祭りを享受することはどのように語られているのか。2009 年度入学で 2011 年に実行委員長をしていた B さんにとっての「あるべき」厳夜祭は、「自由」で、「夜通しお酒を飲んで」いて、「みんなで遊んで」いる「静かな」、「落ち着いた」、「大人の祭り」な厳夜祭である。そうはいっても夜通し人が集まっていることは、D さん同様に B さんも積極的に捉えられており、「ゆっくり朝まで帰らないと、もう終りみたいなのがない。学校でそんな非日常なことないやん。夜朝までさ、暖かいところでできるって、そんな面白いことないやんと思う」と語っている。B さんにとっても厳夜祭は日常を反転する非日常であった。また、厳夜祭が夜通しで開催されることによって参加者の一体感を生むものとなっていた。その一体感は、「朝まで持ちこたえた」や「あほなことしてんなあ」、「何やってんねんやろ」という言葉で表されている。一体感については後述するが、日常的な論理から考えれば、何も生みだしておらず、ただ体力を消費するだけで、意味のないことをしているという自覚が、来場者や実行委員のなかで共有されていたと考えられる。これらのことから、夜間の開催によって、日常の規則が撤廃された空白に持ち込まれるのは、カオス的な現象でもあり、日常の大学という場所では絶対にありえないことがそこには入り込んでいたことがわかる。ここで語られる夜は厳夜祭という非日常を基礎づける条件となっているといえるだろう。

4.2 非日常を支えかつ増幅する大学という場所性

では以上のような非日常の時空間は単に非日常として日常から明確に断絶されたものだったのだろうか。もし断絶が生じているとすればそれはもはや別の日常であろうし、「非」が意味するところをとらえきれない。さらに D さん B さんが語っていたなかで共通するのは「いつもの大学」で普段できないことをすることであった。ここではこの大学という日常性について考察し厳夜祭の第二の基礎として社会的な場所としての大学を見いだしたい。

厳夜祭の概要でも紹介したが、厳夜祭が開催されるのは国際文化学部キャンパスである。国際文化学部キャンパスは神戸大学生全員が少なくとも 1 回生の間に、教養科目と語学を学ぶ場所である。すなわち神戸大学生ならば必ず国際文化学部キャンパスで学ぶことになる。そのためこのキャンパスをある程度知っていることになる。A さんも国際文化学部キャンパスを「なじみのあるキャンパス」と言っていることから、この場所で祭りをしていたことによる厳夜祭への影響は大きいと考えられる。

まず場所と空間の定義について簡潔に検討すると、堀川によれば「〈空間 (space)〉とは、

環境を均質で誰にとっても同じ大きさの立方体として把握することである。〈空間〉は、いってみれば透明な箱であり、何にでもなりうるもの」であり「〈場所 (place)〉とは、その環境に関わる人々の価値観や付与された意味によって規定される、(中略) 不均質で意味の詰まった個別具体的な環境把握の仕方である」(堀川 1998 2010)。ここでは空間は均質的・抽象的な認識の産物であり、場所は不均質で、具体的な認識の産物である。この定義をさらに整理するならば、場所とは記憶や生活と結びついた歴史的(持続的)なものであり、空間とはその場の相互作用の結果生成する非一歴史的(瞬間的)なものである。

4.2.1 場所性と非日常性との混淆及び一般的店舗との差異との混淆により成立する模擬店

ここでは大学という場所性と非日常が入り混じっていた様相を、厳夜祭における模擬店に関して、調査対象者の語りから分析していく。

まず、発達科学部表現学科で模擬店を出店していた A さんと木の家として模擬店を出店していた A さんと H さん模擬店出店の魅力をみていく。A さんは厳夜祭の楽しさを以下のように語る。

筆：厳夜祭の一番楽しかったなと思うところはどこですかね？

A：やっぱり人と出会えたことかな。そこから仲良くなった人がすごく多いから。あとは、これは厳夜祭に限らずかもしれないけど、六甲祭でもできるかもしれないけど、お店を出すことですごい管理能力とか工夫能力が試される場だから、どういう風に自分の店を売っていくとかとか、どういう顧客狙っていくとかとか、よそのお店どんな出してんねんとか。この教室というある意味すごく制限のある場所をどう楽しく魅力ある飲み屋に変えるかみたいな。枠設定どうするかとか。それは楽しかったね。なんやろ、模擬店を作り上げる楽しさみたいな。それはきっと六甲祭でもそうかもしれないけど、厳夜祭ってより自分でやってる感があったから。

筆：自分でやっている感覚は強い？

A：うん。六甲祭でもね、店舗出していたことがあって、タコス売る店をね。でも、テントで机で厳夜祭ほど自由度ないから。工夫し甲斐がないから、(厳夜祭で) 教室丸々使えるってある意味すごく貴重な機会。

また木の家の C さんは模擬店の売り方として以下のように述べている。

C：厳夜祭は売り子でめっちゃ売りに行くみたいなんじゃなくて、みんな割と内を向いているというかなかをこうしようとかが、こういう料理だそうとかいろいろみんなあるじゃないですか。それで人が来る。

さらにHさんは学生自治についての質問の中で以下のように答えている。

筆：学生自治みたいな感じはありましたか？

H：そうですね。一から、コンセプトから何もかも作れるのは厳夜祭ですね。他の学祭はフォーマットがあるっていうか。そういうのが厳夜にはないから、自分たちで作ってる意識がある。

これらの語りから、厳夜祭の模擬店運営者は、まず教室という場を与えられ、その教室を模擬店へと転換しようとする。その際に、一つの模擬店で時間をかけることを前提とする。そして彼、彼女らは教室という区切られた場を与えられるだけなので、模擬店運営者の自由度が高く、自由にその空間を作り上げることができる。そのために能動性や強い動機を持ちつつ、そこに自分たちの「色」を付けることができる。その色をつけるためには「管理能力や工夫能力」が必要で、店内の装飾や提供する品、そこで享受できるサービスが深く検討される。そうして作り上げられた模擬店は、その場に根を張るように、自分たちのもののように感じられた。

さらにこの模擬店は図の通り厳夜祭の教室は普段教室で授業を行う光の量ではなかった(図2、図3)。Aさんによれば、間接照明で暖色系の色を使うことによって模擬店の雰囲気を出していたという。日常的に使用する蛍光灯の光は暗さを排除する光である。教室では文字を読み黒板を見ることが求められるために暗さは排除されなければならない。その一方で、暖色系の間接照明はすべてを明るく照らすわけではないために暗闇を排除することはなく、日常とは異なる教室の雰囲気を生み出していたと考えられる。ここでは食べる、喋る、聴く、飲むといった視覚に頼らない情報が大きな意味をもっていたと考えられる。ここでは視覚は何かを明晰に分析するもの、焦点を合わせるものではない。

このように教室ではない空間を生み出そうとする模擬店出店者たちではあったが、その享受者からすれば、この模擬店は「普通の大学祭の模擬店らしさ」も残っていた。Cさんは模擬店の日常感と非日常感のバランスの良さを指摘している。

C：普段の学校とは違う感じはありましたね。

筆：やっぱり夜っていうのも結構大きかった。

C：そうですね。夜ですしお酒もあるし、でもなんか気取ってないというか、いつもいる教室なんで特に緊張することもなくというか、わざわざ飲みに行く感じでもないというか。ワイワイした雰囲気があったんで。

筆：飲みに行く感じ？

C：なんていうんですかね、別にバーみたいないい感じにしてるところもいい意味で教室なんで、ちゃんとしてるんですけどくつろげるというか、ほんまにその辺のバーとか行ったら、値段も高いしちょっとあるじゃないですか。そういうのが全然ないんで、逆にこう先輩とかに奢ってもらってまわったりとか。

Cさんは、この模擬店の教室らしさの肯定的な面を捉えている。すなわち、模擬店が「気取っていない」、「いつもいる教室で緊張しない」、「わざわざ飲みに行く感じでもない」、「ちゃんとしてるけどくつろげる」と言い表されており、「いい意味で教室」なのである。これは模擬店運営者が教室を厳夜祭の間だけ自分たちのものとすると同時に、その教室性という日常性を完全には排除できなかったことを表している。だがこの日常性の残滓は模擬店に対して敷居の低さを与えていた。すなわち日常性が残っていることにより、その模擬店が行われている場所を知っているという状況が生じるのである。このことを加味すると、厳夜祭の模擬店は、上記で述べた、普段の教室を全く別の空間に転換することに伴う非日常性だけでなく、日常ともつながった、日常をベースとした非日常空間となっているのである。

ただし、厳夜祭という非日常が展開される空間において、模擬店が教室という日常的な場所であることが、基底的な日常性を担保するだけではない。「気取ってない」、「わざわざ飲みに行く感じではない」、「バーは値段が高い」といった表現から、一般的な飲み屋やバーは、日常的な連続性からは区別された場所としてあることがわかる。そこには何か越えなければならない境界があるのだと想定できる。このことは、その場所に何らかの社会的な意味が付随していることを表し、学生の中に一つの判断基準としてあることがわかる。とすれば、一般的な飲み屋やバーといった場所のもつ社会的な意味(彼らにとっての印象)があることで、教室の模擬店の判断基準をもたらし、一般的な飲み屋やバーといった場所と厳夜祭の模擬店とを比較可能にしている。先に検討した教室の模擬店の日常性を考慮すると、ここでの日常性は日常の教室との相対的な関係において、日常性があると判

断されていたのに対して、この比較基準では厳夜祭の模擬店はそこにはない一般的な日常性との相対的な関係において異質性を認められていたといえるだろう。教室という経験的な日常性の残滓とともにそこにはない一般的な日常性という準拠枠（これもそこには入り込まないものとして残滓といってもいいかもしれない）が教室の模擬店という一つの空間の非日常性を際立たせていたと考えられる。模擬店出店者たちが日常性から離れる方向を目指していたといっても、それは日常とは別の純粹で完全な領域が可能でないことがおそらく踏まえられており、この非純粹である不完全さを、模擬店を訪れる人は感知し積極的に享受していたのである。

4.2.2 屋外における場所性と非日常との混淆

以上では教室という局所的な場所性が日常性を残し、その日常性がむしろ非日常性を強化するとともにその空間がそこにいる人に安心を与えることをみた。ここではこの視点を若干拡大し、室内以外の場所性について考察する。まず考察の対象となるのは、教室の外部、すなわち廊下と屋外である。

まず廊下であるが、Jさんは廊下が「めっちゃ殺風景やったイメージある」とし、廊下が電気がついているだけで「白かった」と表現している。ここから廊下が全体的には装飾されていなかったことがわかる。Aさんによると部分的に模擬店の前は装飾されていたとことであったが、廊下は各模擬店のような各々の色はついておらず、中性的な空間だったといえよう。では教室の外では非日常性は見て取れないのだろうか。それが看取できるのが屋外にあるステージだといえよう。ステージではバンド演奏が行われたり地下アイドルが出演したりする。さらにビンゴ大会も行われており、2014年のビンゴ大会では、実行委員が集めた教養の授業のテストの過去問題集が景品として扱われることもあった。このような景品にもみてとれるが、このステージも日常性を色濃く残している。つまりステージ

は図4のなかにもあるが、日常的には駐車場として使われており、学生が立ち止まるとすれば校舎の近くにある掲示板を見る場合で、日常的に学生が集まる場所ではなく、通り過ぎる場所である。さらに厳夜祭のステージの舞台として使用するのは、その裏にあるB109の教壇である。特に楽器を多く使用するバンドの演奏などでは教壇の上にドラムが置かれたりする(図4, 図6)。



図6 2014年の音楽サークルのステージ出演の様子

Dさんは2014年の厳夜祭において「地下アイドル呼んで、オタクの皆さんも来ていたじゃん」と述べており、このときの動画を見ると暗い中で盛り上がっている様子がうかがえる⁷。また、2012年から14年までステージ運営に関わったLさんも印象に残っていることとして「毎年最後軽音Ⅱ部っていうバンドが締めてたけど、そういう時に盛り上がっていたりとか、毎年最後に部員全員で会えた」ということを述べている。これらの表現から見える普通の大学にはいない人が来られるステージの開放性や全員いるかどうかは決して自明ではないのに「全員」として表現されても不自然ではない感覚はいかに説明できるのだろうか。

それは大学校舎において暗闇のなかで行われていたことによると考えられる。まず校舎の合間で校舎に囲まれていたことを考察すると、校舎は教室よりもひとまわり大きいものだが、勉強をする場所、日常的な学生生活を送る場所という性格は変わることがない。そしてそれに付随する掲示板や広場はやはり学生やそこで働く職員のためにあるのである。これらの場所は、教室や仕事場とったものとは異なり、そこで長い時間を過ごすような特

⁷ <https://www.youtube.com/watch?v=604OSaZ-dsI> (最終閲覧日 2018年12月19日)

定の積極的な意味をもっていない。ここでは校舎に対して従属的な性格しかもっていないといえる。しかし厳夜祭において掲示板や広場といった場所がステージバックやステージそのものとして積極的に利用されるということは先ほどの教室がその性格を教室という積極的な意味付けをされたなかで模擬店という混淆的な非日常へと転換されるのに対して、無性格性という消極的な意味を、ステージとして積極的なものへと転換しているのである。

ではここで、暗闇であることはいかに関係してくるのか⁸。そのひとつは、夜の開催であるという外在的な契機であり、もうひとつはステージを照らす光とそれが生む陰というステージ内在的な契機である。外在的な闇は暗黒ともいえるものであろう。それは確かに夜という時空間に特有のものであるが、それだけでなく、ここにはステージを照らす光がある。そして光と陰が常に対としてあることを踏まえれば、ステージを照らす光は陰を生み出している。ということはここに二種の暗闇があることになる。ステージにおいては二種の暗闇が混じり合うのである。そしてこの混じりかたはステージの光を一方の極とし外在的な闇を他方の極として、暗闇の度合いのグラデーションとなる。ということはステージの周囲に集まる人々はこの二つの極の間のどこかしらに位置することになり。ここにはステージの光に照らされているステージ出演者も含まれるはずである。この二つの極に挟まれて限定されていることがここではステージを一つの圏域として成立させていると考えられる。この暗闇はステージを仕切る非物理的な壁として考えられるだろう。そして暗闇のなかで光を当ててステージが開催されることは外部からその空間を切り取るだけではなく、内部における求心力をも持ち合わせている。すなわち明るい所（例えば夜の家のなか）から暗いところをみたときに、暗闇が広がってほとんど何も見えないのに対して、暗い所から明るいところをみるときは明るい所はよく見えるのであり、暗闇側に光は放射状に広がることになる。このような光と暗闇がもたらす意味を考慮してステージを考察すると、ステージの性格上、ほとんどの人はステージに向かって立ち、ステージをみる。壁としての暗闇は、ステージバックの装飾が張られた掲示板の向こう側か自分の背中側にしかない。そのとき観客は壁の内側にいるという共同性をもつことになるのではないだろうか。そしてその共同性は先ほど見た外部からの切り取り、限界づけをもたらす暗闇の壁によって限定されることになる。そしてこのその場での共同性が明暗と密接に関わっていると考えれば、その明るさはそこに接近するものを引き寄せるのだが、その内側からはその接近は感

⁸ 空間と明るさ関係についての社会学的な研究がないわけではない。ジンメルによると、空間における枠の大きさは関係形成に大きな影響を与え、暗闇においては集合に対して特別な枠が与えられるとしている (Simmel 1908)。

知されないということが生じるために、不可避免的に開かれた共同性が生じるのである。以上のことからわかるように、日常的な場所性と祭りの非日常との混淆は屋内の模擬店という限られた空間だけではなく、屋外における暗闇に仕切られた空間においても生み出されているといっていよう。厳夜祭においては国際文化学部キャンパスという神戸大学生にとってのなじみ深さをもつ場所性とその日常的な場所を祭りの空間にするという非日常性が混淆して存在していたといえるだろう。

ここまでは教室やステージといったあくまで局所的な空間、すなわち教室なら物理的な壁、ステージであれば暗闇という壁に仕切られた空間が混淆的な空間であることをみてきた。しかしそれだけでは個々の空間で単に諸々の要素が混じり合っていたとしかいえない。混淆的な夜と祭りの関係を考えるためには、祭りという現象が単にその場で経験されるだけではなく、それが後にその経験が統合されるときにも祭りとなることを踏まえ、祭りの全体的な様相を考えなければならない。以下の節ではその混淆的な個々の空間が個々の空間で閉じずに厳夜祭という一つの現象として成立することについて考察する。

4.3 移動と多元的な空間

ここで考察のきっかけとなるのは先にみたLさんが厳夜祭の雰囲気として語った以下の言葉である。

L: 国際文化学部でやってた時はステージみたいなものやってたとしても、別に他のもの模擬店とか出してるみたいな感じ。だから同時多発的にいろんなイベントという企画があったから、それが雑多なものが同時に成立しているみたいな言いかたになると思うんだけど。強いてなんか言おうとしたら、なんかそれによって醸成されるような雰囲気。無理に一つのを強要しない。だからここにいるから盛り上がれとか、騒げとか。ある種、ライブとかだとそういう雰囲気があるかもしれないけど、そういうのじゃなくて個々人が行きたいところ行って好きなことやってて結果として成立しているみたいな雰囲気かな。

Lさんにとっての厳夜祭の雰囲気は、「同時多発的にいろいろな企画」が行われ、雑多なものが同時に成立することによって生じていた。それは参加者に「無理に一つのを強要」せず、個々人が自分の趣向に合わせて好きなことをしていることによる雰囲気であった。ここでは同時多発性に注目したいと思う。なぜ厳夜祭が同時多発的と形容されるのだ

ろうか。六甲祭でも同時多発的に様々な企画が行われているはずである。例えばグラウンドで模擬店をしていると同時に第一学舎の前ではステージ企画が行われ、その周辺でも音楽のライブが行われている。ここで考えなければならないのが国際文化学部キャンパスにおいて密集度をもって厳夜祭が行われていることである。六甲台キャンパスで大規模な祭りをしようとすれば、場所が離れざるを得ない。Aさんが言うような「六甲祭は開放されていて、厳夜祭は密集している」という表現にみられるように、厳夜祭はそれぞれの企画が近い場所で行われているために、同時多発性や雑多性を感じやすいといえよう。

だが実際のところ字義通りに同時多発性を見ることはできない。国際文化学部キャンパスの屋根を取り払って上からすべてを見渡さなければそれを「同時多発的に企画が行われている」と表現することはできないはずだ。これはもちろん六甲祭にも当てはまることではあるが、ある現象が同時多発的に見えるというのはどういうことなのだろうか。もちろんLさんが実行委員長として全体の企画を把握していたということは言えるだろうが、それだけで「同時多発性」を雰囲気と言えるだろうか。実際Lさんはそれによって「醸成される雰囲気」を重視している。

となればその場ではなく、祭りが終わった後に遡及的に様々な企画があの日あの場所で同時に生起していたということしかできない。そしてそのためには厳夜祭における種々の空間を往来しなければならない。だがこの移動は決して通り過ぎるような移動ではない。Aさんは六甲祭と厳夜祭の楽しみ方の違いとして移動の違いについて語っている。

筆：社交とかも好きなんですか？

A：好きだね。私は結構人とよく喋るタイプだからそういう意味では厳夜祭のほうが話しやすかったな。密集度もあるし、コミュニケーションをとる量が六甲祭とは全然違うから。六甲祭ってやっぱり見て回って見て回って見て回ってずっと移動スタイルじゃない。でも厳夜祭って一つのお店に留まってしばらく飲んでその間のコミュニケーションをして、また次のお店行ってまたしばらくそこで留まってっていう。移動が少ない分時間をかけて楽しめる。そういう意味でコミュニケーションは六甲祭より起こりやすい感じ。密度も高いコミュニケーションもとれたんじゃないかな。

六甲祭の移動は常に移動し続けるものであり、厳夜祭はある場所、例えば模擬店に一定時間留まることを含んだ移動である。こうした停止を伴う移動によって個々の空間はそれぞれが個性的な空間として認知され享受されることになる。そしてまた次の空間へと「殺

風景な廊下」を移動し別の個性的な空間へと入り込むことになる。こうした経験の密度の高さと移動が厳夜祭を語る際の多元的な空間を可能としていたのではないだろうか。つまり、この移動は単なる物理的な移動ではなく、国際文化学部キャンパスという日常的な場所における移動ではあるのだが、目指される空間およびその人がいる空間は非日常的な空間であり、そのなかを移動することになる。結果的に人々がそこで移動した厳夜祭は遡及的にはあるが、多元的空間と表現される。そこでは参加者は混淆的な諸々の場を混淆的に経験することになるのである。

こうした既知の場所と未知の空間が混ざり合った場を移動することは、その場にいる人々に曖昧な感覚を与えるのではないだろうか。すなわちその場が既知でもあり同時に未知でもあるような感覚である。以下の章では以上で述べてきた混淆的時空間がその場にいた人々に与える影響とそこでの相互行為が再び時空間に跳ね返る様相を検討したい。

V. 混淆性と共同性

この章では混淆性と共同性について検討する。まず聞き取り調査データにおける「会話がしやすい雰囲気」という語りをきっかけに、厳夜祭に生じていた親しみやすさを考察する。

Fさんは2011年から「木の家」として模擬店を出店していた。Fさんは普段からよく人と喋るわけではないのだが厳夜祭には「話しやすい雰囲気」があったという。それはお酒の影響でもあったが、厳夜祭の開催時間が長く、席に座ってゆっくり話せるからであった。同じく「木の家」として模擬店を出店していたCさんも、普段なら話すことのない映画研究会の人に話かけたり、「席座ってお酒飲んでるときに隣の席とかにきた同じような大学生の団体とか喋ったり」していたという。またCさんによると、そこにいる人が「お酒の力」と「来場者との距離の近さ」という「空間の力」の二つの力によって「誰かの知り合い」に感じられ、コミュニケーションがとりやすかったという。つまり全く知らない人でも、知り合いの知り合い程度の人間関係の距離に感じられたということである。それまで会ったことのない人がそのように感じられるほど厳夜祭における互いの心理的な距離感は小さかったと考えられる。

ここで注意しなければならないのは、自身の力というよりは「お酒の力」や「空間の力」によって親近感が生じていたということである。ここには相互行為とそれが行われる空間が密接に関連していたことが見いだせる。お酒の力や来場者との距離の近さといったもの

をその場の雰囲気として考えれば、その場の雰囲気が親近感を生むものであったといえるだろう。ただしこの雰囲気は力といっても強制力をもつものではない。このことは「開かれた宅飲み」や「プライベートな時間の共有」といった表現にも見て取れる。

Cさんは厳夜祭の模擬店でのご過ごし方を以下のように語る。

C：あとまあ、ゲームしてたりとか、他にも映画みたいなのもやってたイメージがあるんですけど、なんか開放された宅飲み感があるというか。家でなんかしながら酒飲むののちょっと広がってるような感じが印象としてありますね。

同様のことは両者とも2013年入学で、厳夜祭実行委員をしていたKさんとLさんも述べていた。Kさんは、厳夜祭を「合同飲み会」と表現し、最後のオールナイト開催となった2013年の厳夜祭を以下のように話している。

K：めっちゃ楽しかった。それこそ非日常みたいな感じなんかな。雰囲気が落ち着いてきて、それぞれ（の人）がゆっくり自分の時間楽しめるみたいな。そういう雰囲気があった。

またLさんは、夜の時間帯について以下のように述べている。

L：（夜は）プライベートな時間だよな。昼間はパブリックな時間だよな。それが祭りを通して広がる感じなのよな。お祭りを通してプライベートな空間がちょっとパブリック寄りになる。こうみんなで共有している感じになる。パブリックはもうみんなの場所なんだけど、プライベートを共有するとちょっと違うじゃん。

これらの語りからみられるのは、まず雰囲気の力といえるものは、来場者にネガティブには作用していないことである。プライベートを否定することのない雰囲気なのである。そしてここでは日常的に考えられる種々の二項対立の境界が非常に弛緩していることも看取できる。すなわち「家の内／外」、「公／私」の対立は「開放された宅飲み」、「ゆっくりできる合同飲み会」、「プライベートの共有」として混じり合ったものとなっている。

この混淆は、Lさんが述べる厳夜祭とパブリックな場所との差異、すなわち「パブリックはもうみんなの場所だけど、プライベートを共有するとは違う」として説明できる。パ

ブリックとして自立してしまった場所は、みんなの場所であるがゆえに誰の場所でもないのだが、プライベートの共有という表現ではそれが個々人から切り離されておらずその場所が個人を起点として成立していることを意味している。このことはDさんが、一時的に「大学をジャックしている」と述べたこと、つまり大学が学生の場所であることが日常的には感じられないことから生じる場所の所有感覚と同様のものである。厳夜祭という現象は、個々人から隔絶され、来場者に対して強い強制力をもつものではないのである。ではこのような厳夜祭とその場にいる人々との繊細な関係、すなわち強い強制力を来場者にもたらさず、プライベートを感じさせながらもそれがプライベートにとどまらず広がりをもつということはどのように成立しているのだろうか。このことは先ほどステージの暗闇が生み出す共同性と開放性を論じた際に、暗闇の性格がこの相矛盾する契機を取り込んでいることを考察したことから検討できるのではないだろうか。つまり共同性を生み出す契機とそれを限界づける契機との同時成立、すなわちその混淆の様態を検討する必要があるのではないだろうか。

まずここではその場における人間関係を考察する。すぐに明らかになるのは厳夜祭における人間関係が一時的であることだ。すなわち合同「飲み会」、「普段は話さない」、「プライベート」といった表現は、それらの否定物が日常的には中心である。つまり自明のことではあるが、厳夜祭でない状況を前提としている。そしてこれらのことが、その程度は違うだろうが、その場にいることによって共有されていると考えてよいだろう。ここではこの非日常の共有が人間関係を形成するうえで一定の作用をもたらしているといえる。しかしそれだけでは、知らない人とは喋らないだろうし、喋ろうとまでも思わないだろう。例えば居酒屋にいても見ず知らずの客といきなり喋ることは考えにくい。つまりLさんが述べたところの「プライベートの共有」までは到達しないのである。普段喋ることができなくても喋れるというCさんの語りが示すのは、その関係形成のための契機としていつもとは違うことをしているということ以上のものが必要になるではないか。

しかしCさんの語りでは、関係形成に積極的に作用するものはあまり出てこない。その代わりに厳夜祭に来ている人の特徴を以下のように語っている。

C: ウェイ系の人は、みんな盛り上がってるんですけどそんなにいないというか、お酒飲んでウェイとなってるんですけど、ウェイ系の人ではない気がして、…盛り上がってるんですけどね。ウェイ系という表現があいまいですけど、イメージ的にそんなのがありますね。

つまり C さんの印象では厳夜祭には、盛り上がることに直結するような「ウェイ」と呼ばれる人があまりいなかったのである。それにも関わらず厳夜祭には盛り上がりがあったという。ここでは関係形成にいつもと違うこと以上の何かがあったというよりは、ウェイではないとして否定的に括られる人たちがいたのである。厳夜祭に来ていた人たちの印象は他のインタビュー対象者にとっても独特のものとなっている。

A さんは参加していた数年間で厳夜祭の印象が変わったところがある⁹としながらも厳夜祭には独特の人がいる印象があったという。

A : やっぱり コアな人が集まる。面白い人が集まるっていう印象があった。六甲祭とは違って。神大のなかでも 尖った人たち、くせ者たちが集まるところが厳夜祭にはある。

そして厳夜祭という機会でしか「コア」で「尖った人」は集まらなかったとし、自分自身も「コアな人」だったと表現している。また別の個所では厳夜祭の特徴をその来場者の一体感に見出している。

A : 厳夜祭と六甲祭の一番大きい違いは 一体感が全然違う。六甲祭は来てる人が一組一組バラバラ好き勝手楽しんでる感じだけど、厳夜祭は全員で一体感があるというか、なんか同じ人種だよねみたいな。

筆 : 何か共有…

A : そうそうそう、お前どうせへんなやつなんだろみたいな (笑)

これらの語りから厳夜祭に来る人がある程度決まっていたことがわかる。それは神戸大学生全体のなかでも「コア」、「尖った人」と表現されるような人たち、すなわち神戸大学のなかで多数はいない人である。この来場者の限定性は、A さん自身もいうように「大学の近くに住んでいる」、「お酒が飲める」というものもあったが、厳夜祭に来る人が決して大多数の人ではないという否定的な契機を含み、この否定性が共有されていたといえるだ

⁹ 2011 年に B さんが委員長になった際に、昼間主生に開かれたものにしようと思図してアイドルを呼び、ゲーム大会を開催するなどして以降の厳夜祭を示している。2011 年以降は来場者の人数が増加し、酒類提供の際に制限が掛けられるようになっていった。A さんはこの 2011 年以降の厳夜祭を「クリーンな厳夜祭」と呼んでいる。

ろう。この否定性の共有によって、来場者が日常的には逸脱者として扱われる傾向にあるないしそのような印象をもたらすとしても、厳夜祭においてはそこにいる人々が基本的に「〇〇ではない」という否定性を共有しているために、この性格が積極的なものとして作用していた。その結果としてCさんがいうように、見知らぬ人でも「誰かの知り合い」に感じられ、Aさんのように「お前もどうせヘンなやつ」といった表現がなされ则认为られる。こうして厳夜祭という非日常の場におり、最低限互いが神戸大学生らしいということだけを知り、その場での人間関係は基本的にその場限りである。互いに何か共通性がある可能性が高く、会話が容易で、さらに模擬店の人との会話であれば、相手の所属する集団の情報もある程度知ることができる。となるとこの親近感と公私の混淆は、その場限りの関係ではあるが、何かは互いに知っているかもしれないという既知と未知が混じり合う点で生まれるといえるのではないだろうか。

以上に考察した厳夜祭における人間関係に対して、一時的であることを除けば、その性格形成に寄与するのは、多くは厳夜祭以前のことである。つまり厳夜祭が開催される前にある程度決定されているものである。では実際に祭りを経験することを通して得られる経験としての混淆性はいかなるものであろうか。これはIV章で検討した場所や空間の混淆性のため、すなわち日常生活が行われるという場所性と厳夜祭という非日常性が混じっているために、その状況が参加者に対してその場が混淆的な場であることを指し示し続けること、暗闇による共同性と開放性の混淆と同時性成立、移動性による日常と非日常の両者を交互に認識することによっているのではないだろうか。

最後に、厳夜祭における具体的な経験を通して共同性を生み出した事例を検討することで、以上に見出された諸々の混淆性をもつ厳夜祭とそこにいた人々の相互行為とが密接に関連し、その場にいた人々が概念ではなく経験の対象として、厳夜祭に参加し作り上げる感覚を得ることについて考察する。

2012年から実行委員になったGさんは、2014年の厳夜祭において落とし物をその場にいた10人ほどの参加者で探し見つけたときのことを以下のように語っている。

G: その場にいた10人くらいで1時間ぐらいかかって探したのね。しかもあったのね。あった瞬間に周り一斉に拍手だよ。あの瞬間は実行委員じゃなくてその場にいた人との一体感あったよね。そういう点で言ったらみんな仲間感はあったね。

Gさんは厳夜祭において「みんな仲間感」を感じていた。この仲間感覚は落とし物を拾

うという共同作業をし、それが見つかったという達成によって仲間感覚を覚えていた。さらに厳夜祭の運営について以下のようにも語っている。

G：厳夜祭に参加する人たちっていうのは、作っている側と参加している側の壁が薄いから、みんながつくついているといえれば確かにそういえなくもないというのは他の祭（灘チャレンジ¹⁰、六甲祭、須磨青空元気フェスティバル¹¹、その他地域の行事）より強いかな。そうなるとお互い一緒にやったよねって言ったときに、もうそのやるっていうのには参加しただけではなくて、運営とまではいかなくともあの雰囲気を作り上げた仲間だよねっていうのが含まれて来ると思う。

Gさんによれば、厳夜祭では祭り当日に実行委員や模擬店運営者という運営側と来場者側との垣根がなく、それゆえにその場にいる人全員が祭りを作り上げる感覚をもたらしたという。それはその場所にただいた、参加したという共同性だけでなく、祭りの雰囲気を作り上げるところまで祭りに参与していたという共同性であった。準備段階で運営側と来場者側は分けられていることが前提となるのだが、ここでは明らかに実行委員側と模擬店運営者及び参加者までの間の明確な垣根がない。すなわちそれまで対立していたものが混ざり合っていることが一体感、共同性を生み出していた。それは初めから単に混ざり合うことを形式的に共有することで生じているのではなく、その場での諸々の経験を通して実践された混淆を共有しているといえるだろう。

VI. 結びに—混淆的な夜と混淆的な非日常／日常と非日常の連続と非連続

以上夜という時空間やその場所が与える現象への影響を検討してきた。最後に先行研究で示した混淆的な夜という時間と厳夜祭における非日常現象における混淆性が、神話や民俗誌といった物語られたものから空間性に転換していることを示し、今後の祭礼研究や社会学にとっての夜についての考察の可能性を提示し本稿の結びとしたい。

Ⅲ章でみた混淆的な夜は昼と夜との対立項としての夜ではない、夕刻の薄暗い時間を指し示すものであった。そしてその時間帯は常に曖昧で化け物がでるかもしれない時間帯であった。Ⅳ章で検討した厳夜祭という事例にはあらゆる点に混淆的な現象を見いだすこと

¹⁰ 1995 年以降、阪神淡路大震災の復興祭として 7 月初旬に都賀川周辺において開催されている。

¹¹ 1995 年以降、須磨海岸で 10 月末に開催されている。

ができ、その混淆性が共同性を生み出すところまで明らかにすることができた。混淆的夜そのものは厳夜祭という事例から直接的に見出すことは出来なかったが、厳夜祭という祭りにおける混淆性は十分に描けたのではないだろうか。ここから考えられるのは、山口や柳田が神話や民俗誌から見いだした曖昧な時間帯は決して、私たちに直接はなじみのないものでも、過去の遺物でもなく、現に大学祭において空間的に経験されるものであり実感できるものである。

ここで実感されるものは祭りという現象であるが、デュルケームが祝祭によって社会を現前させることを考察したこと、そしてGさんが一体感を感じていたということを顧みれば厳夜祭は一つの社会だったといえる。

しかしこの社会はデュルケームが方法論として示す実在的な社会というよりもむしろ、ジンメルが示す相互作用とともにある社会であろう。すなわちジンメルは社会を諸個人のあいだの心的な相互作用だと考え、「人びとのあいだの社会化は、たえず結ばれては解消し、また新たに結ばれ、本来の組織へと上昇しないばあいさえ、永遠の流動と脈搏として個人たちを結びあわせる」（Simmel 1917=1994 : 12）。このような根本性格をもつ社会をジンメルは社会化（*Vergesellschaftung*）と表現する。この社会は絶えず動き続ける動的なものである。さらに社会化が個々人を結びつけるというときには社会の側から個々人への作用も含意されている。ということは人々の間の相互作用の様相が変化したときそこに生じる社会もまた日常的な社会とは異なるはずで、その日常とは異質な社会もまた個々人の相互作用に影響を与えるのである。デュルケームは社会が人びとに感じられるのは社会の規範を人々が破ったときだと示した（Durkheim 1895=1978）。だが祭りにおいてはおそらく社会の規範を破らなくとも祭りにおいて「社会」というのは実感できるであろうし、その「社会」を実感することは日常的な社会を相対化することにもなる。

このような社会観に立てば、混淆的な非日常は一つの独特の「社会」を生み出すことになる。そして厳夜祭において生じる社会が客観的な夜という時間帯に開催されていることとその共同性を持ちうるという点を考慮すると、柳田が祭礼と区別する「祭」と結果的にかなり近いものとなっているのではないだろうか。ただ柳田はその「祭」を過去のものとし、共同体の成員と非成員を鋭く区別するものであったのに対し、厳夜祭ではあらゆる対立軸が緩み混淆的になることによって、結果的に柳田がいうような日常と全く異質な「祭」に（すくなくとも観光として消費されるような祭礼ではない）近いものを生み出していたのではないだろうか。

ここまで混淆的時空間としての厳夜祭を考察してきたのだが、最後に疑念を抱くとすれ

ば、混淆的ではない時空間は果たしてあるのかということである。そしてこの問いは柳田の論じる「祭」との差異を考えることにもなる。

日常生活のあらゆる状況において未知と既知や移動や場所の読み替えというのは起こりうるし実際に私たちは混淆の時空間を実践しているといえるだろう。しかしその場合には混じり合ったものを排除するように私たちはおそらく日常生活を行っている。可能性を切り縮めることで日常生活を成立させている。同様のことは厳粛な儀礼や祭礼にも妥当することであり、これらの場面では明確に日常と違うということを演出するために日常性がそこに入り込むことを厳しく制限し、一義的に儀礼や祭礼は進行する。不純なものから距離をとることで時空間を聖化していた。例えば柳田が論じる本来的な祭りとしての夜の「祭」は他の共同体ないし日常の時空間がそこに入り込まないことが重視されていたといえるだろう。ということは、厳夜祭は日常生活において混淆性を低減させていくことや厳粛な儀礼や祭礼として混淆性を排除していくことは異なり、その混淆性、日常的な生活の内部にすでにあるものとしての混淆性を追求することによって、日常の内部から、日常との連続性を喪失することなく、その日常性を積極的に取り込むことによって、逆説的に日常から距離のある特定の領域を生み出すのではないだろうか。

こうして夜と祭りを考察することによって、民俗誌や神話が扱っていたものを社会学へと意味あるものとして取り入れる可能性を示唆できたのではないだろうか。そして夜という時空間とそこにいる人々や場所、そこで生成する社会との関係の強さを見ることができたのではないだろうか。さらにそれは祭りという現象を介することによって可能になったことではないだろうか。だとすれば祭り研究において今まで着目されてこなかったないし自明なものとみなされてきた夜という契機に注目することは決して突飛なことではないし、研究の蓄積が必要だと思われる。また本稿では、対面的な相互行為に対して暗闇が与える影響については十分に検討できなかった。今後の課題としたい。

確かに夜も厳夜祭のような祭りもその混淆性から周縁部に排除される傾向にある。現に厳夜祭は 2014 年以降国際文化学部キャンパスで開催されていない。しかし夜や祭りはその混淆性ゆえに私たちに確保された自由を行使できる時空間である。この時空間は決して昼を否定するわけではなくあくまで昼に依存し昼の論理（経済的な合理性）があるからこそ夜の特異性が際立つことになる。夜は決して原初的な混沌ではないのである。

参考文献

- 芦田徹郎, 2001, 『祭りと宗教の現代社会学』世界思想社.
- Durkheim, Émile, 1895, *Les règles de la méthode sociologique*, PUF (réédité en 1937, comme Quadrige 2). (= 1978 宮島喬訳『社会学的方法の規準』岩波文庫)
- 堀川三郎, 1998, 「歴史的環境保存と地域再生—町並み保存における『場所性』の争点化」
船橋靖俊・飯島伸子編『環境』(講座社会学 12) 東京大学出版会.
- , 2010, 「場所と空間の社会学：都市空間の保存運動は何を意味するのか」『社会学評論』 60(4), 517-534.
- 中野紀和, 2005, 「祭礼研究の現在—祭礼と都市祭礼」, 現代伝承論研究会編, 『現代都市伝承論—民俗の再発見』岩田書院, 203-224.
- Simmel, Georg, 1908, *Soziologie : Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Duncker & Humblot, Berlin (=2016, 居安正訳『社会学—社会化の諸形式についての研究』白水社.)
- , 1917, *Grundfragen der Soziologie : Individuum und Gesellschaft*, G. J. Göschensche Verlagshandlung GmbH, Berlin und Leipzig (=2004, 居安正訳『社会学の根本問題—個人と社会』世界思想社.).
- 谷部真吾, 2011, 「祭礼研究の軌跡—中村孚美と米山俊直の祭礼論を事例として」
『HERSETEC テキスト布置の解釈学的研究と教育』5(2), 43-66.
- 山口昌男, 2000, 『文化と両義性』岩波現代文庫.
- 柳田国男, 1969, 『日本の祭』角川文庫.
- , 1999, 『柳田国男全集 第20巻』筑摩書房.
- 米山俊直, 1986, 『都市と祭りの人類学』河出書房新社.

(神戸大学大学院人文学研究科)